

秋季リーグは東北福祉大が2季ぶり66度目の頂点に立ち、閉幕した。今季就任した大塚光二監督の下、選手たちが個人タイトルより勝利を貪欲に求め、最高の結果をつかみ取った。

福祉大は豊富な投手陣をフル稼働。規定投球回を満たしたのは主戦佐藤優だけで、完投はなし。波多野陽介から先発を担える人材も惜しみなく救援に投入し、抑えに起用したリーグ現役最多勝投手の城間竜兵は9試合で防御率0・00。細心の継投には安定感があつた。

打線は上位校との後半戦に調子のピークを合わせる調整が実った。前半戦は低調で、チーム打率2割7分9厘は仙台大、東北大に次ぐリーグ3位。それでも、仙台大との1回戦で楠本泰史が決勝本塁打を放ち、2回戦は九回に2点差を逆転するなど、大一番で勝負強さを見せつけた。

仙台大は2位。昨秋に続き福祉大に春秋連覇を阻まれた。ドラフト1位候補の右腕熊原健人、首位打者の松本桃太郎、打点王の郷古裕樹、主砲大坂智哉の4人がベストナインに名を連ね、

福祉大 投手陣が安定 仙台大 直接対決で力出せず

総
評

投打に役者がそろっていたが、福祉大戦では力を十分に発揮できなかった。

3位の学院大は投手陣の駒不足が響いた。主戦本田圭佑は前半戦の18日間で5試合に登板。肝心の仙台大、福祉大戦で精彩を欠いた。ただ、2年生右腕の鈴木遼太郎が3勝を挙げ、頭角を現したのは頼もしい。打線は波が大きく、苦戦する要因の一つとなった。

4位の東北大は仙台大、学院大と第3戦に持ち込む粘りを見せた。主戦橋口徹ら主力は2年生。来季は上位3校の牙城を脅かす存在になりそうだ。5位東北工大は主戦菊地和成の負担が重く、打線は確実性を欠いた。6位の宮城教育大は選手の入替わりによる戦力ダウンで苦しんだ。

今季は審判員の曖昧な判定が目立った。選手側のアピールで覆したり、主審と塁審が何度も協議を重ねたりしては、試合の秩序は保てない。強い日差しや強風の中、緊迫した試合に臨む苦勞に感謝の念は尽きないが、どうか、毅然（きぜん）としたジャッジで白熱したプレーを支えてほしい。

（佐藤琢磨、及川智子）